

東北旅行記

小島武志

絢爛たる金色堂

△金色堂、そこには藤原三代の幽霊がたはっているように思えた。それほど神祕的で、絢爛たるものだった。芭蕉が絶賛を惜しまなかった松島で我々はたつた。だ眺め渡し、そして胸にじんときるものを感じているのみであった。そしてこの好風を胸に焼きつけながら、帰途についたのだ。

我々東北旅行団は、去る三月八日信州を出発して、一路芭蕉による日程百五十日に及ぶ大旅行の一つ、平泉、松島へと向った。丁度国鉄の順法と重なったが、かき、第一日目が始まったのである。

三月とはいえまだ肌寒から東北路を北上し、車窓から東北の風土は冬の余韻を残した山々が横たわっていた。平泉に近づくにしたがって、雨が雪に変わってゆき、温度もだいに低くなっていった。予定より3時間遅れて、雪の平泉に足跡を印したのである。昔、藤原三代の来華で盛えた町として、はじめて寂しく、静かであった。第一日目の宿数百年という巨大な杉並木に空を覆う。又雪の降である金鶏冠に行き、無事雪の平泉(二日目)平泉は奥羽、北上の両山脈に囲まれ、その間を縫う北上川の流域に出来た盆地である。ここに藤原三代で京洛を形どった都を作り、金ピカの仏像や堂宇を次々と建立したのである。

東北線の平泉駅から歩いて十数分、ひなびた奥羽街道をたもとで両側の茶店を抜ける。しかしアスファルトにより、かた、冷たいものもあって、雪の平泉に足跡を印したのである。昔、藤原三代の来華で盛えた町として、はじめて寂しく、静かであった。第一日目の宿数百年という巨大な杉並木に空を覆う。又雪の降である金鶏冠に行き、無事雪の平泉(二日目)平泉は奥羽、北上の両山脈に囲まれ、その間を縫う北上川の流域に出来た盆地である。ここに藤原三代で京洛を形どった都を作り、金ピカの仏像や堂宇を次々と建立したのである。



金色堂

で神祕的であった。この坂を登りきると、左手に弁慶堂がある。そこからの衣川古戦場の地であった。衣川の傍に緑の丘があり、東北の米どころといわんば、この丘を築いた。さて弁慶堂を後にして、しばらくゆくと、地蔵堂があり、更にその先に、五月雨の降りに残してやがて芭蕉が奥の細道行脚の途中で一句を残した金色堂と経堂がひととき目立って雄姿を見せてきた。

高麗に義経をおそい、これを減ばす。それから数ヶ月後、泰衡も頼朝に討たれて、一造の天工、いれの人か造るふるの詞をさむ。と芭蕉にたたえられた松島には、二百数十ある島々に、松の木がたけ、波に浸食されて奇観を呈している。

また坂上田村麻呂の創った五五大堂、現在の建物は伊達政宗の建立で内部は五大天王がまつられて、慈覚大師開基と伝えられる。

伊達六十二石の菩提寺、殿守などはこの代表の跡である。

私は、このみちのくつを通過して、古人の心にななかつたと思う。

私は、雪の平泉、日本一の景の松島のやまつくよう光景を胸に、東北の終止符をつけて、一路松島へと向ったのである。

「仙丈ヶ岳登山」この山行により我々山岳部は数多くを学んだ。今度の登山は、一年にとっては最初であり、かつ三年にわたる最後の山行であった。部員個人の印象は異なるにしても、それは深く尊いものであったと思う。

六月一日の午後タクシで戸台へ入った。部員十四名、顧問二名の別が丹波山荘への道を歩み始めた。庄への道は歩き始めは決して軽くなかったが、それより一歩ずつ山荘へ近づいて行くと、夕方丹波山荘に着き、暮蒼と夕食の用意に着手した。尾根へ出たのである。仙丈を見るのができた。

なんと雄大な山だろ、頂上を見ながら馬ノ背を走らされた。雪渓をトラバースしながら登山を続けた。いよいよカールを目前にした。仙丈ヶ岳への山行であった。

見ると三つ須弥壇から成った、壇の上には阿彌陀仏を本尊とする十一体の仏像が安置されている。その壇の下には、清衡、基衡、清衡の三代の遺体がミイラとなつて納められている。

この三つ須弥壇は、藤原氏の金に糸目をつけて、完成の日時に制限をつけず、存分に職人に腕を振るわせる芸当等は、北方の王者であった。それでは、いかにその雄姿を現わすか、それがこの堂の目的である。

二代基衡は父に劣らぬ大規模の毛越寺を建立した。今日、毛越寺の面影は見る由もないが、ただ藤原時代の庭園として知られる大泉池が悠々と水をたたえて、残る。東北の地ならは、残る。東北の地ならは、残る。東北の地ならは、残る。

大学だより

北海道大学 平沢亨輔

伊那北高の皆さん、伊那北では、今本祭の準備で忙しい事と思います。こちらは、札幌へ来てから二月余りたち、その間大学祭等があり、ようやく落ち着いたという感じですが、今に北大の事はよくわかりませんが、書いてみたいと思います。

北海道大学は東大と並び全国一という広いキャンパスを持ち、森や芝生もあり、また札幌が工業都市でなく、空気が澄み、さらに下宿の状況も他の都市に比べて、よく勉強する環境にもなっています。

この大学の中には、各学部・大学院・低域研究所等があります。おもに理系が中心の存在で、優れている文類は、数から言っても歴史から言ってもやや劣っている感じがあります。今に北大の事はよくわかりませんが、書いてみたいと思います。

学生の数は約四千五百名、地元からばかりでなく、本州からの人も多々おり、中には九州から来る人もいます。浪人も多々、留年する人もまた多々あります。

学生の気質には、北海道らしく、おおらかなところがあり、また、例を挙げれば、大先輩にのける仮装行列では、ふんどし一本になつて行進するグループもあ

り、饒達のクラスでは一升びん数本の酒を買って行進中にまわし飲みをしながら見物しながら酒を飲ませる者もいました。進む途中では酔ってスクラムを組んで歌をうたったり、噴水に飛び込む者も十数名いました。

このような気質ですから、学生運動も活発です。学長が保守的な上、最近「小選挙区制」に、最近は法学部等の問題があり、ますます活発になっていきます。しかし活発といつても一般学生とは無関係で、また行動は主に革マル系の執行部と民青系の全学連行動委員会の勢力全うです。例を挙げれば、大先輩にのける仮装行列では、ふんどし一本になつて行進するグループもあ

養部で一般教育課程は広く学ぶこととすべし、学部に入るとすぐに、学部に移行する方法とどちらがよいか問題になっていきます。

この問題以外にも北大の教養部は問題があり、それは教養部が他の学部比べて軽視されがちだということです。予算の面においても、授業の質においても貧弱な点が多いです。例えば授業はマスプロ授業から差別され、た(？)先生であると言われている。先生も例年六月を過ぎると出度する人が大幅に減少するようです。

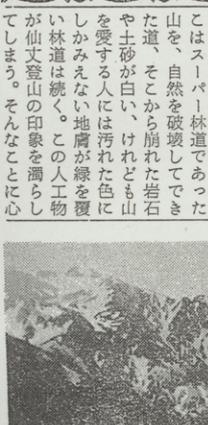
最後に北大で切り離されています。最後は北大で切り離されています。

新聞作りとは、こんなに大へんことなのだろうか。原稿依頼から回収、割り切りまでやることはスムーズにいかぬ。何かが、伊那北らしいところのために、四無主義のため、ノイローゼになりそうだったが、不死鳥のように生き返った。期末テストの勉強はそのそが、そのために、やる気が向いたら出すつもりだ。

先ほどの話に戻るが、とにかく上伊那郡を中心に日本中、名門校から始まっている。初め、名門校から始まっている。初め、名門校から始まっている。初め、名門校から始まっている。



応援団



仙丈ヶ岳

「仙丈ヶ岳登山」この山行により我々山岳部は数多くを学んだ。今度の登山は、一年にとっては最初であり、かつ三年にわたる最後の山行であった。部員個人の印象は異なるにしても、それは深く尊いものであったと思う。

六月一日の午後タクシで戸台へ入った。部員十四名、顧問二名の別が丹波山荘への道を歩み始めた。庄への道は歩き始めは決して軽くなかったが、それより一歩ずつ山荘へ近づいて行くと、夕方丹波山荘に着き、暮蒼と夕食の用意に着手した。尾根へ出たのである。仙丈を見るのができた。

なんと雄大な山だろ、頂上を見ながら馬ノ背を走らされた。雪渓をトラバースしながら登山を続けた。いよいよカールを目前にした。仙丈ヶ岳への山行であった。

高麗に義経をおそい、これを減ばす。それから数ヶ月後、泰衡も頼朝に討たれて、一造の天工、いれの人か造るふるの詞をさむ。と芭蕉にたたえられた松島には、二百数十ある島々に、松の木がたけ、波に浸食されて奇観を呈している。

また坂上田村麻呂の創った五五大堂、現在の建物は伊達政宗の建立で内部は五大天王がまつられて、慈覚大師開基と伝えられる。

伊達六十二石の菩提寺、殿守などはこの代表の跡である。

私は、このみちのくつを通過して、古人の心にななかつたと思う。

私は、雪の平泉、日本一の景の松島のやまつくよう光景を胸に、東北の終止符をつけて、一路松島へと向ったのである。